56　砂防事業の地域活性効果について
～中央構造線博物館の利用状況から～

信州大学農学部　○細川容宏（岐大連農）、北澤秋司
大鹿村中央構造線博物館　河本和朗

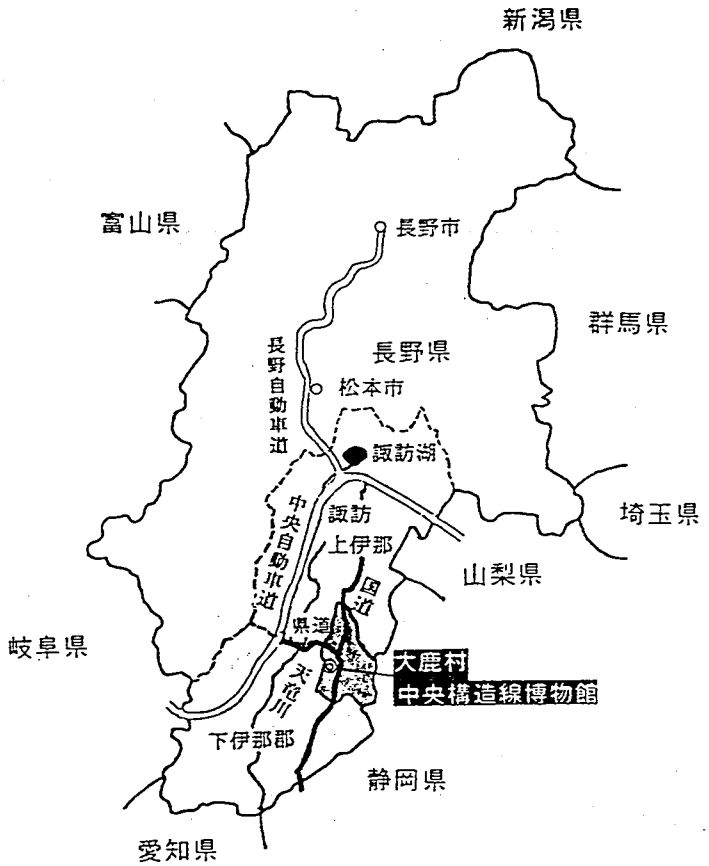
1　はじめに

地域活性化という言葉が砂防事業で使われて久しく、最近ではいたるところで地域活性化のための砂防事業を展開している。砂防事業の効果については、所期の被害軽減効果の他に様々なものがあると言われている。防災関連公共事業としての砂防事業の本質を眺んで、この効果を防災効果と地域活性効果とに大きく分類する考え方がある（土井ら、1990）。このうち地域活性効果はさらに投資波及効果と地域振興効果に分類されるが、現在、特に農山村で実施されている地域活性化のための砂防事業は、主として地域の観光を支援することを目的としていることから、この２つの効果が期待されていると思われる。しかしながら、これらの効果に対して砂防事業では概ね間接的に関与しているため、その評価は客観的に表現するのが難しく、又評価手法についても一様なものがないと言える。むしろ結果が評価となっているのが実態であると思われる。

このことから、これからの地域活性化を踏まえた砂防事業実施のため、これらの事業効果の評価手法を検討する上で間接的に関与している施設の来訪者の傾向の検証が必要と思われる。今回、砂防事業と関わりの深い施設について来訪者の傾向の検証を行ったので報告する。

2　調査対象の概要

今回調査の対象としたのは長野県南部の大鹿村にある中央構造線博物館である。大鹿村は天竜川支川小渋川の上流域に位置する人口1,707人(平成５年１０月１日現在)の過疎の進行している農山村である。主たる産業は農業と建設業である。主たる観光資源は南アルプス登山と温泉である。交通体系は南北に国道が走り、西に県道が走っているが、ほとんどが未改良区間である。この国道の南北それぞれの村界は峠となっており冬季には交通閉鎖される。従って村外から村内へのアプローチは実質的には県道１本である。また、村の中央を南北に中央構造線が走り、地形発達史的にみて組織地形が卓越しているため、小渋川本川をはじめ各河川は土砂流出が盛んであり、災害



図－１　大鹿村中央構造線博物館位置図

も多くまたその下流に及ぼす影響も大きかった。この対策として昭和８年から県の農村振興土木事業による砂防事業を着手し、昭和１２年から内務省直轄の施工となり現在も建設省直轄事業が施工されている。

このように災害と砂防事業との関わりの強い村は、平成５年８月に中央構造線博物館を建設省の協力により開館した。管内の展示内容は、小渋川流域の地形模型、中央構造線の露頭面の削剥展示、岩石展示等の中央構造線に起因する地質関係の展示と砂防事業に関するパネル展示、ビデオ放映設備等の砂防事業関係の展示が挙げられる。

3　調査手法

博物館は平成５年８月の開館以来平成６年９月末までは無料入館としてきた。この間、来館者に半強制的に記帳を依頼した来館者名簿（住所と氏名）から来館者の傾向を地域別来館者数、再来者数の度合い、来館者の季節変動の観点で分類、整理し、次の点について考察を行った。

①地元住民の関心の度合い（地域への浸透度）

②観光要素との関連

③来館者の居住（又は勤務）地域の範囲

なお来館者の季節変動に関して、平成６年１０月以降は隣接された村の民俗資料館と共通で有料化されたが、その入場券発券数を資料に使用した。

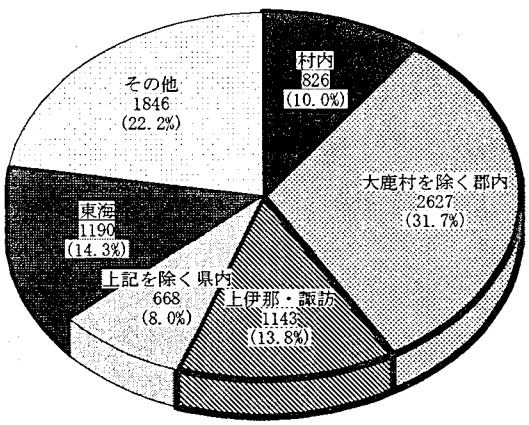
4　結果

①地域別の来館者状況を表－１及び図－２に示す。

再来者も含めた延べ人数で見ると、村内の来館者は全体の10％であり、生活圏を同一とする郡内及び近接の上伊那・諏訪地方を含めると全体の55％強に達する。又、県外では東海地方（静岡、愛知、岐阜、三重県）及び関東・甲越地方が多く、これは近接地域外の県内来館者数を上回る人数である。再来者数を除いた来館者を見ると村内で７４３人で村の総人口の43％が来館したことになる。

表－１地域別来館者数

地域	人数(再来者含む)a	再来者を除くb	a/b
全数	8300	8066	1.029
村内	826	743	1.112
大鹿村を除く郡内	2627	2558	1.027
上伊那・諏訪	1143	1103	1.036
上記を除く県内	668	662	1.009
東海	1190	1174	1.014
北海道・東北	114	114	1.000
関東・甲越	1198	1185	1.011
北陸・近畿	206	199	1.035
中国・四国・九州	66	66	1.000
その他・海外・不明	262	---	-----
中央高速道路沿線4都県圏	1520	1499	1.014



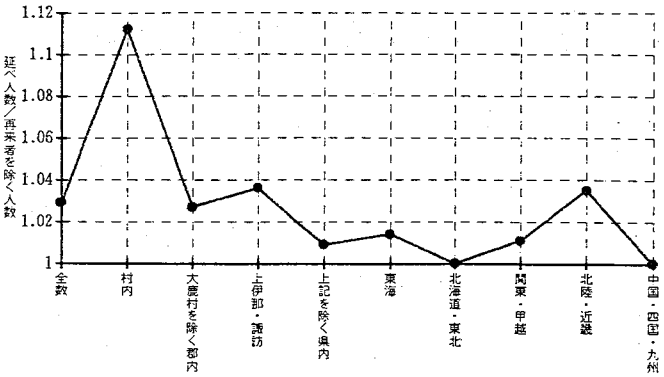
図－２　地域別来館者割合

②再来者の度合いに関する結果として、表－１及び図－３に再来者率の地域別比較を示す。

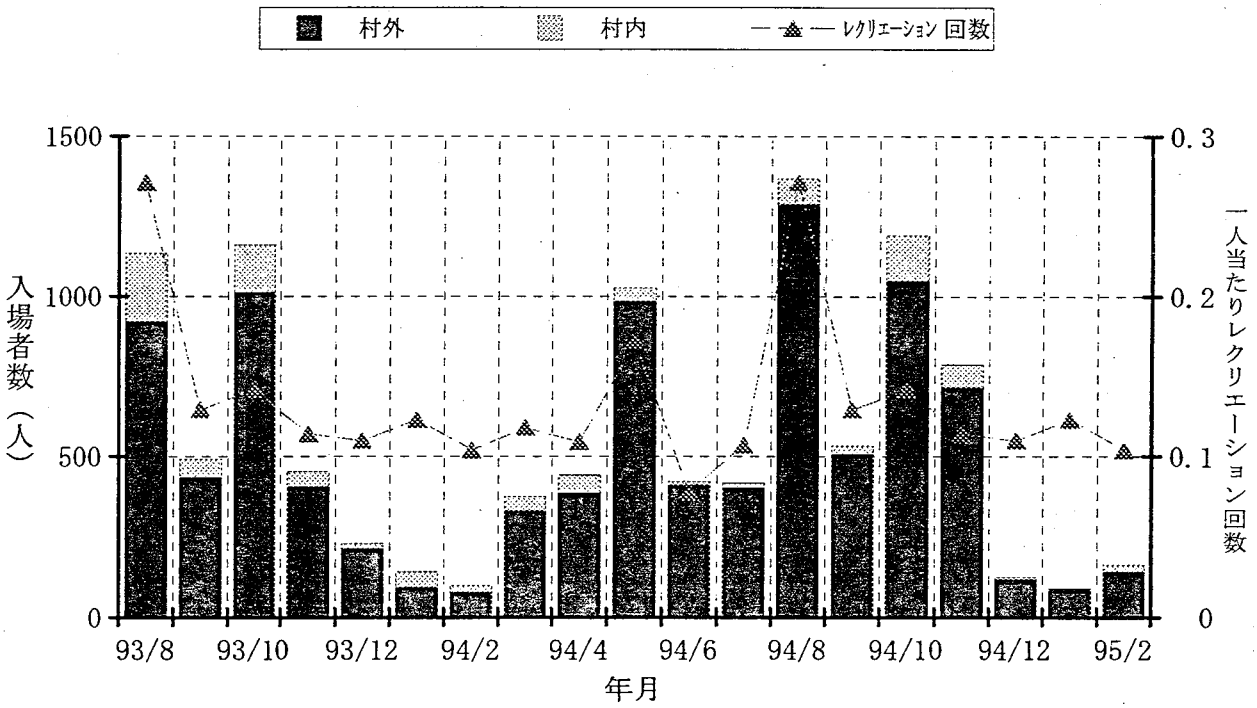
村内の再来者率は1.112で最も高く、距離が遠くなるにつれて低くなる。

③季節変動に関する結果として、月別の入場者数を図－４に示す。

８月がピークで、５月と１０月が相対的に多く、１２月から２月までが相対的に少ない。



図－３　再来者率の地域別比較



図－４　月別入場者数

一人当たりﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ回数は、宿泊観光ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ回数の一人当たり平均回数の平成元年から５年までの平均回数（平成６年版観光白書）

5　考察

①地域への浸透について

表－１から、村内の来館者のうち再来者を除いた人数が７４３人で村人口の約43%が開館以来１４カ月で訪れたこと、また郡内及び近接地域からの来館が半数を越えていること、さらに村内来館者の再来率も他地域よりも高く一人当たり1.112回来館していること、また距離が遠くなるほど再来率が低くなることから、地域への浸透効果はあると思われる。これは一般的な傾向によるものであると考えられる。

②観光要素との関連について

図－４から、月別来館者の推移には季節的な変動が現れている。来館者数が相対的に多いのは５月、８月、１０月であり、相対的に少ないのは１２月、１月、２月である。これを、宿泊観光ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ回数の一人当たり平均回数と比較すると、１０月、１２月、１月、２月で変動のずれが生じている。この原因としては、１０月に大鹿村最大の観光行事である大鹿歌舞伎の定期公演が開催されるため、これに付随して来館する人数が増えるものと考えられる。また、１２月、１月、２月については、村内に冬季観光施設がなく、かつ、国道が交通閉鎖されるため村外からのアクセスが県道１本の袋小路状態になるため、観光目的

の来館者が減少することによるものと考えられる。

③来館者の居住（又は勤務）地域の範囲について

来館者の居住（又は勤務）地域については、日本全国に広がるものであるが、表－１及び都道府県別来館者数から検討すると、郡内及び近接地域からの来館が55％強であるのに対して、県内の他の地域からは６６８人（8%）と少ない人数となっている。しかしながら中央高速道路沿線４都県の地域からは1520人（18.3%）と多いことから、高速道路利用の来館者が多いことがうかがえる。これは、中央構造線博物館から自動車利用により日帰り又は１泊が可能な距離以内に位置する地域からの来館者が多いことが推察される。また観光要素との関連について付け加えるならば、来館者の主目的が自動車利用の観光を目的としていることが推察される。

６　まとめ

今回の調査により、中央構造線博物館の効果として、

①地域別来館者数と再来者率とから、博物館の内容の地域への浸透が可能なこと、

②地域別来館者数と月別来館者数とから、中央構造線博物館の地理的条件を前提とした施設の観光資源化が可能なこと、

の２点が言えると思われる。しかしながら、これらの効果が直接的に砂防事業による効果かどうかは現時点では判断できないが、中央構造線博物館の内容によっては、砂防事業の地域活性効果が発現できる可能性が十分あると思われる。また、それを検証するためには今後来館者に対するアンケート調査を実施し、詳細な傾向を検証する必要がある。

また、今回の調査では無料期間の資料を用いたが、平成６年１０月以降の有料化による来館者の傾向を検証することも、効果の評価手法の検討に必要であると考えられる。

参考文献　１）土井ほか：砂防事業の社会、経済的評価に関する研究、1990、土木研究所資料　２）長野県統計協会下伊那支部：平成６年版飯田・下伊那・郡市勢要覧、1994　３）総理府編：平成６年版観光白書、1994